

---

# **珍しく友達が二次創作「天体観測」**

暴走したのを恥ずかしいけど晒す。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

珍しく友達が二次創作「天体観測」

### 【Zコード】

Z8021Z

### 【作者名】

暴走したのを恥ずかしいけど晒す。

### 【あらすじ】

河野夜兎さんがBUMPがいいとか言っていたので思いつきでやつてみた。

一晩掛けただけの駄作。

入院した夜兎さんに捧ぐ。

(前書き)

夜兎さんへ。

入院したと聞いて、BUMPとか言つてたので、懲りずに作つてみました。

長くなるので読まなくとも結構です。

他の人へ、

ラフメイカーみたいに崩壊はさせませんから。

信じて下さい！

青い空。

白い雲。

絶好の毎寝日和だ。

・・・。

あいつの居ない教室は寂しい。

隣の席がぽっかり空いて、心にも穴が空いたみたいだ。

みたいじやない、空いている。

現に、今、俺は泣いている。

あの時の後悔の気持ちで。

時計を見た、

『A・M・2:00』

その時、電車が通った。

カンカンカン

ガタンガタン

「よし。」

待ち合わせの時間には間に合つた、

背中に背負つた望遠鏡がちょっと邪魔だが、仕方がないだろう。  
おまけに、小型ラジオをベルトに結んでいるので荷物がかさばるか  
さばる。

そのラジオから天気予報が流れる。

「ザー・・・・・ 地方の夜は雨も降らず、涼しくなるでしょう。今  
日は 座流星群、貴方も流れ星を探してみてはいかが? さて、  
お次は・・・・・ ザー」  
よし、天気はオーケーか、  
これは失敗するわけにはいかない。

「ごめん! 待つた?」

そんなテンプレの挨拶と共にあいつがやつてきた。

時計は

『A・M・2:02』

となつていた。

「はあはあ・・・・・、これ、持つてくれない?」

「天体観測するには多すぎるだろ・・・・。」

「これが最後になるんだからさ、失敗するわけにはいかないでしょ。」

「ああ、そうだな」

「ちょっと、そんな顔しないでよ。最後なんだからさ、笑つて。」  
作り笑いで「まかした。・・・ あいつの機嫌はまだ直つてないけど。

「やつと着いた・・・・・、ふう。」

「男のくせにだらしないな、もう。」

ぱんぱんに張つた腕をさすりながら座り込んだ。

「あ、シートあるから。今から出すね。」

と言つて、あいつは持つてきたカバンの中をのぞき込んだ。

「それにしても暗いな・・・。」

「ホントにね。」

どこからかあいつの声が帰つてきた。

「もう・・・明日出発なんだな。」

「そんな事言わないでよ、それ抜きで楽しもうつて、昨日決めたじゃん。」

気付くと俺は歯を食いしばつていた。

「幼なじみなんだろ、相談してくれても良かつたじゃんかよー。」

「ごめん・・・。」

そこで俺はやりすぎに気が付いた。

「お、俺こそ言い過ぎた。」

暗がりで見えたあいつの手は、震えてるよう見えた。

「じゃあ、気にしないでやるつ」

「始めようか。天体観測」

「流れ星、いっぱい見れると良いね~」

思えばあの時、いや、天体観測中ならいつでも、  
あいつの手を握つてやることは出来なかつたのだろうか。  
あいつの手を握つて、不安を消し去つてやれなかつたのだろうか。  
俺のも一緒に。

「おー！　何度言えれば分かるんだー！　起きるーーー！」

前で先生が怒鳴つていた。

「ふわあい・・・。」

そう言ってノートを開き教科書も開き、そしてまた、空を見上げた。

「おー、こつまでそりせりつて泣いてんだ。もう一ヶ月もそんな生活

してたのか？」

あきれたように同級生が言った。

「ああ。おれはもう・・・。」

「さつせと学校来い。もつ中二、欠席とかも受験に響くぞ。」

ドアの向こうから来る声に、未だ俺は心を動かされていない。

「なあ・・・、何でお前は学校行ってんだ？」

「高校入るためだよ。」

「じゃあ、何で高校行くんだ？」

「就職するため。お前何が言いたいんだ？」

「就職できて、社長になったとしても、それだけで幸せなのか？」

お金があればいいのか？

「いや、恋とかするだらうし、ちゃんと温かい家庭とか、信頼できる友達とかも出来るだらうし。」

「無理して学校行つて、心に傷を負つたまま学校行つて、精神崩壊しながら社長になつたって何が幸せなんだ？」

「逆にお前はホームレスで良いのか？」

鬱陶しそうに言つた。

「ああ。それでも良い。心が傷つかないとこひなうどいでも。」

「ああそつか。じゃあ学校来るな。」

怒らせてしまつたらしい。

いつつもこんな事考へてるせいか、後半は自然と口から出た。  
もづけりとマシな追い返し方無かつたかな。

ちよつとあこひこまほ悪いとしたかな、と血の罪悪感はある。

証拠に、登校してからずつとあこひこまほ口をきいていない。

「おいー。また寝てないだらうな。」

また怒鳴り声が聞こえた。

「ねてませ~ん」

俺は、わがままなだけか。

あいつが好きで、辛い運命があつたとしても好きで、でも、その運命からは逃げたくって、逃げそびれてこの有様か。

「・・・ねえ、私たちって、端から見たら恋人じゃない？」  
「ライト持つてきでないのか？ 暗くてほとんど分かんないんだが。」

「ねえ、聞いてる？」

「ああ、ライトがなきや、他からは全然見えないぞ。」「もう、遠回しな皮肉はやめて。」

あいつが頬を膨らましたのは暗がりでも分かる。長年の付き合いの賜だ。

「星が見づらくなるから、ライトはいらないでしょ。」「ああ、そうだったな。それにしても・・・」

「何？」

「星が綺麗だ。」「

「そうだね・・・。」

一人でうつとりしながら言つた。

あの時、俺たちは希望を探していたんじゃないか、と思つ。絶望的な状況で、一回現実から逃げて、ゆっくり考え直そつ。と思つてたんだろつ。

また現実逃避して、考え方直している。  
でも、あいつはもう居ない。

もう俺は一人だ。

ベッドの中、ドアの向こうの声が止んだ。

「よし・・・」

そう呟きながら俺は出た。

あれだけうるさいと書ける物も書けない。

机の端を見る、

たまりにたまつた便せんの山、中には文字がぎっしり並んでいる。いずれも、初めは

『お元気ですか？ 僕は元気です。心配事も大してないので大丈夫です、時々、君を思い出す程度です。』

こんな嘘ばっかりつづった手紙。ただ一つ、本当に君を思い出してい

いるけど。

「失敗・・・しちゃったね。」

あいつは、ずっと手が震えている。

「まあ、天氣が悪いんだ、仕方ないよ。雨で見えにくいが、あいつは泣いている。

「そうだね・・・。」

そう言つてあいつは荷物を片付け、帰つて行つた。

残つたのは嘘ばかり流すラジオと望遠鏡、後はびしょぬれになつた俺だつた。

どれぐらい経つただろうか。三十分ぐらいか。  
くしゃみをして、やつと俺は動き始めた。

あいつの手を握つて、不安を和らげるることは出来なかつたのか。

気の利いた台詞でも言つて、一緒に笑つて帰ることが出来たんじやないか。

後悔の念と共に、泣き出したい思いが帰ってきた。

ただ、後悔の思いの方が強かつた。

「まだ行けるんじゃないか」と、心の中の俺が言いつ。

望遠鏡を背負い、自転車にまたがり走った。

その時、俺は思った。

あいつを愛するからこそ、俺は強くいられる。

苦しい運命も、あいつが居て、立ち向かう勇気が出でてくる。

それが後の俺の支えになるとは思つても居なかつたが。

しばらく、部屋から出てない。

ラジオから流れる天気予報を聞いている。

「ザー・・・今度は 座流星群天気が良いので今夜は天体観測でもしてみては?・・・ザー」

嘘つきの天気予報がまた、あの時みたいな放送をする。

でも、気が付くと、あの踏切の前だつた。  
時計を見ると、

『A・M・2:00』

後一分で、あの場所に行くつもりだ。  
たいした理由はない。

今だつて、二人は愛し合つているんだから。

どんな試練も乗り越えて見せよう。

何があつたとしても、僕は強くいなくちゃならない。

君のために。

長い長い回想だった。

そろそろ授業も終わる頃だろう。

心に穴が空いたって、それでいいんだ。

あいつが戻つてくれば埋まる。

それまで、運命を打ち負かせるぐらい強くなつてればいい。

それで、いいんだ。

俺は、大きく伸びをし、欠伸をしながら考えた。

今日の天体観測のスケジュールを。

(後書き)

夜兎さんへ

入院してゐるから熟読しないようなつまらない作品を、と思つてつまらなくしました。

・・・嘘です。かなりの自信作です。  
一晩とはいえ、自信作です。

他の人へ

出来れば感想お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8021n/>

珍しく友達が二次創作「天体観測」

2010年10月11日00時07分発行